

星の精をみる中国のゆくえ

中嶋 嶺雄



運動まで、きわめて広範で多様な内容がそこに含まれていることである。

第二には、一昨年九月の中国共産党全国代表会議、昨年九月の同六中全会における社会主義精神文明決議、そして本年秋に予定されている中国共産党第十三次大会という一連の中国政治過程をめぐって、鄧小平氏らの改革派と陳雲氏らの原則派(一般には保守派といわれているが、私はむしろ原則派と呼ぶべきだと思ふ)あるいはその中間派とのあいだに存在する一種の路線闘争が今回の運動に複雑な影を落としていることである。

この両者がからんだ今回の出来事は、従って、自然発生的な要素をもちつつも、中国のこれまでの学生運動やデモがそうであるように、やはり内政上の角逐と相関的なものだと見なければならぬ。

多様な反体制運動 今回の運動を観察していると、そこに二つの大きな特徴を指摘することができよう。まず第一は、入浴について不満といった学園生活改善要求から現体制の中途半端な改革の問題点を根本から批判しようとする高次元に政治性を帯びた反体制

えた運動の急進化・尖鋭化して党から除名されたことに危機感をいだいて、急拠により、中国の民主化運動これを抑圧する姿勢を示すにいたった最近の経緯もこのことを物語っている。

近代化さらに遠回り

覚醒した意識、今後とも潜在

こうしたなかで、去る一くせい)させられた青年や月六日に党の機関誌「人民日報」の社説が、同八日には単の機関紙「解放軍報」の社説が、「ブルジョア的自由化」への強い反対を打ち出したことによつて、今回の学生運動は大きな転機を迎えたのであるが、次に注目すべきは、中国科学技術大学副学長の方励之、評論家の王若望、作家の劉賓雁の三氏が学生を煽動し、反党思想を鼓吹したと

かけて北京、杭州、上海を訪れていた。中国社会科学院日本研究所と本田財団が共催した「技術文明と現代化」と題する北京シンポジウムに出席するためであった。

開放は表層の変化

ちょうど二十年前の文化大革命開幕期以来、中国はしばしば訪れているが、いわゆる「開放」体制下の北京から脱却するには長期の時間が必要であり、中国の現代化は急いでも無理である旨を私が先のシンポジウムで報告したところ、何人かの中国知識人が「よくぞ本当のことを言ってくれた」と手を握られたことは印象的であった。

このように、中国の根本的な変化が始まっていたのだが、民主と自由を求める知識人や青年たちの運動は、ここ当分の冬の間閉ざされ続けるのではなからうか。こうした中国の近代化は、さらに進まねばならぬ。

(東京外語大学教授)現代中国学)

俳壇展望

藤田 湘子

「俳句年鑑(角川書店)、「俳句研究年鑑」(富士見書房)が出そろって、昨年の俳壇の決算もひとまず恰好(かっこう)がととのった按配(あんぱい)だが、一年をかえりみて私の胸につよく残ったことは二つある。

一つは、私と古館曹人氏とで「俳句」十二月号で対談したとき、曹人氏が口を切るなり「今年印象深かったのははきりい寂(さび)という言葉だ」とのこと。これは山本健吉氏が、水原秋桜子最晩年の作風を喝破(かっぱ)したことは、秋桜子没後やや低迷の感ある同門の士気を鼓舞したと疑いなく、それ以上に、昭和俳壇における秋桜子俳句の位置づけをあまりに簡潔に、犀利(さび)の重要な言葉を語ってくれた言であつた。秋桜子門の私にとつて、山本氏の「はきりい寂」の指摘はありがたく

<きれいな寂>に感銘

酔えない未曾有の盛況

遊記」に登場する金角大王が持っている純金の赤いひょうたんのごときは、たまたまのじゃあない。金角に名を呼ばれ、ひとたび返事をしようものなら、その者はたちまちにひょうたんの口に吸ひこまれてしまふにやがて腰(こし)のようになつてしまふ。方湖の近辺を歩きまわると、遊技を業(なりわい)としているチベット人のテントは、千人もの人間を閉じて

死のようたん 日中合同探検行



たの黄色いテントをのきに寄ってくる者もある。「ああ、これですか。これは移動式のお寺なんです。緑起物、緑起物、テントの内部を探索した三人のおおあちゃんに、私はそう教えてさしあげた。「オヤマ本当かい。あがた、ありがたや、」はあちゃん泣はそう言っ